

St. Luke's International University Repository

開学満20周年記念特別寄稿 極東における看護教育(その1) Rockfeller Foundation Archive(1921-1930)からの翻訳 Nursing Education in the Far East. Translation of Rockfeller Foundation Archive(1921-1930)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日野原, 重明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/155

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



極東における看護教育（その1）

Rockefeller Foundation Archive (1921-1930) からの翻約
NURSING EDUCATION IN THE FAR EAST
Translation of Rockefeller Foundation Archive (1921-1930)

学長 日野原重明

現在の聖路加国際病院と聖路加看護大学とは、現在、前者は財団法人、後者は学校法人としてそれぞれ独立した法人施設であるが、ルドルフ・ボーリング・トイスラー医師によって創設された病院と看護教育の学校とは、そのルートは一つである。

次号の紀要に続くこの報告書は、トイスラー院長とロックフェラー財団との間にどのような交渉がもたれ、その中で日本の看護教育がどのように受けとめられたか、そのいきさつが具体的に示されている。

トイスラー先生は明治33年（1900年）1月に米国聖公会の宣教医師として来日され、同年4月には、将来の看護教育の日本の指導者をつくるために荒木イヨ氏を米国に留学させ、明治35年（1902年）には明石町築地に20床の聖路加病院を開設し、看護婦養成の場を作られた。

明治45年（1912年）には病院を4階造りの建物とし、チャペルも併設された。この病院建築には大正天皇の御内帑金5万円が建築資金援助として下賜され、一方米国の教会信徒や資産家から多大の寄附があった。

これはトイスラー院長の非常な努力によるものであるが、トイスラー院長はこの頃からロックフェラー財団に接触をもたれ、看護教育事業に経済的援助を受けることに懸命に努力された。

本報告書はRockefeller Foundation Archivesに載せられた1921-1930年間の報告書の前半である。

大正9年9月（1920年）には聖路加国際病院附属高等看護学校が開設され、看護婦のセントジョン夫人が主事として迎えられた。この1年前の1919年には米国のジョンズ・ホプキンズ大学の看護保健学科では看護のマスター15人とバチェラー15人が出たのである。

昭和2年（1927年）にはわが国最初の看護の専門学校として聖路加女子専門学校（本科3年、研究科1年）が認可された。

これが戦後昭和29年に聖路加短期大学となり、昭和39年には聖路加看護大学となった。昭和55年には大学院看護学研究科に修士課程が作られるに至った。

本学がその揺籃期の中で、トイスラー院長とロックフェラー財団とがいかなる交渉をもっていたかをこの報告書は示すものであり、大学の前身の歴史の実体を知る上で有益な資料となるものと思う。

I. 日本（1913～1927）

聖路加の最初の申請、1913

北京ユニオン医科大学（Peking Union Medical College）（Vol. 3 P517～671 参照）を除いて、当ロックフェラー財団の東洋の看護教育に対する関心は東京の聖路加病院（St. Luke's Hospital）に集中して考えられてきた。聖路加病院が当財団に援助をしてほしいという申請は、この病院が財団法人として認可された（1913年5月13日付のR. B. トイスラー氏（R. B. Teusler）からJ. D. ロックフェラー氏（Mr. J. D. Rockefeller）あての手紙）（聖路加病院1913～1916）1913年5月に、まずロックフェラー氏に提出され、そのあと、秋に、ロックフェラー財団自体に提出されたのである。（1914年9

月19日付のトイスラー氏からR. S. グリーン氏（R. S. Greene）あての手紙、聖路加病院1913～1916）。要請の根拠の中心は、聖路加病院が、東京在住の外国人たちのために提供するサービスの重大性にあった。申請は好意的に受けとられたものの、当ロックフェラー財団側には「現在、聖路加病院に寄付することを妥当とすることを根拠づける十分な材料を入手していない。」と考えた。当時、ロックフェラー財団では、第一次対中国医療委員会（Medical Commission to China）をつくる計画が進行中であったので、この委員会が聖路加病院のニーズに特別な配慮をすべきだという勧告を出せば財団としてはこれを問題にしようということになったのである（1913年10月21日付聖路加病院に関する覚え書き、聖路加病院1913～1916）。

第一次对中国医療委員会の勧告

聖路加病院々長のトイスラー博士が、1914年9月、東京にあるこの委員会に彼の計画書を提出したところ、委員会はそれに賛同する旨をニューヨークへ報告した。すなわち、委員会は具体的な条件付きで5万ドルの補助金を出すことをきめたのである(1914年11月9日付 R. S. グリーン氏 (R. S. Greene) から J. D. グリーン氏 (J. D. Greene) あての手紙、聖路加病院 1913~1916)。マーフィー氏 (Starr J. Murphy) の報告要約文をみると、当病院が有用な働きをしていること、病院は極めて合理的に組織されていること、特に外国人の病人の治療の場として、さらに「必ずや、日本の病院に良い影響を与えることができる」範を示す病院としても存在意義があること、等の趣旨が書かれていた(1914年12月15日付、マーフィー氏による、聖路加病院に関する対中国医療委員会の報告に関する覚え書、聖路加病院 1913~1916)。特に、委員会のメンバーであり、後に、中国医療局 (CMB) の局長となった R. S. グリーン氏は補助金が早くおりることを切に希望した。それは、この補助が、中国における自分たちの任務に間接的な影響を与えること、また、それにより、在日中国人医学生が日本人の役人や教育者らと交流できる機会がえられること、この二つの理由によるものであった(1914年11月9日付、R. S. グリーン氏から J. D. グリーン氏への手紙、聖路加病院 1913~1916)。

実施の延期、1914年12月

ジェローム・グリーン氏 (Mr. Jerome Greene) も、聖路加の援助申請に、個人的関心を寄せた。というのは、「自分自身の、長い日本居住経験、ならびに自分の父親が死の直前、当病院から得た恩恵、という二つの理由で、」と彼自身述べている通りである。しかしながら、彼は、自分の同僚たちに圧力をかけて、「彼ら全体として当然とるはずの態度とは別の態度をとらせることは決してすべきでない」と考えていた。一方、財団役員一般が決意をためらったのは、当聖路加病院への関心や信頼がないためではなく、むしろ、中国の、更に大きい、かつ、更に広汎なニーズの方が念頭にあったためと思われる。その理由は、中国の方が、委員会の勧告のように、多額の経費を要しているからである(1914年10月28日付、J. D. グリーン氏 (J. D. Greene) から J. W. ウッド氏 (J. W. Wood) への手紙、聖路加病院 1913~1916)。しかも、この新しい、戦争救済プログラムでは、相当な資金を要することが確実であったので、そのために財団がどの程度責任をおわなくては

ならないかが判明するまで、他の責任は負うべきではない、という理由のようであった。とはいっても、財団内部の気乗りうすの真の理由は、それとは別のものにあったようである。それは、当聖路加病院がアメリカの聖公会の手で建てられたという事実のためである。ところが、聖公会は大きくて裕福な団体であるにもかかわらず、聖路加病院の稼いだ収入の損益バランスの年間不足を支援することに対しては、僅かの年間救済援助しかしていなかったためである。

マーフィー氏は、「ロックフェラー財団の資源をもっと別な方面で、多額に、かつ、緊急に必要としているところがあることを考えると、この様な状況下では、ロックフェラー財団が聖路加に援助することを特に配慮すべきだとは、私の本心は考えられない。聖公会なら病院の面倒をみてくれるであろう。」と書いてきている(1914年2月15日付、マーフィー氏 (S. J. Murphy) による、対中国医療委員会の報告に関する覚え書き、聖路加病院 1913~1916)。

このような次第で、援助問題は無期限延長となった(1914年12月30日付けの J. D. グリーン氏から R. S. グリーン氏あての手紙、聖路加病院 1913~1916)。翌一月、R. グリーン氏は、より複雑化した世界情勢をかんがみ、財団の再度の考慮を促がしてきた。彼は、中国での仕事をすることに関連して、日本と友好的な関係を保つことが以前にもまして重要だと思ったからである(1915年3月16日付の R. S. グリーン氏から J. D. グリーン氏への手紙)。その後、第二次対中国医療委員会は、彼らが日本滞在中の期間になるべくなら聖路加に寄付がなされるようにロックフェラー財団に忠告するよう要請をした(1915年7月26日付の J. D. グリーン氏からフレクスナー氏への手紙)。

この委員会のメンバーは、1915年8月末に東京にいたことを我々は知っているし、彼らはトイスラー博士とともに首相、大隈伯爵によるレセプションや昼食会で、もてなされたことも知っている。しかしながら、その昼食会が、アメリカへ立っていくトイスラー博士の送別のため、並びに、中国委員会へ敬意を払うための二つの目的で開かれたことは、ほんの偶然にすぎなかった。しかも、財団の使節団であるその委員会のメンバーがそのまま中国へ直行したということは衆知の事実であったようである(1915年、中国委員会報告 601 A-CMB, Vol. XI, Pl-2 参照。1915年9月2日付ザ・ジャパン、アドバタイザー抜粋)。いづれにしても、委員会による、聖路加に関する正式な報告は一つとしてなく、彼らの訪問のせいで何か協力プログラムが実現化したということもなかった。聖路加に対するロックフェラー財団の最初の援助金がいよいよほんとうに計上されたのは1926年のことである。

ピアス博士 (Dr. Pearce) の日本に関する調査, 1921年

聖路加に向けられたロックフェラー財団の関心がこんなに後になって復活した主な理由としては、財団内の医学教育部の設立と、1921年の日本の医療状況に関する、ピアス博士の調査が挙げられる。その時の聖路加病院は、対中国医療委員会が1914年に調べた時点での60床のサイズから100人以上の入院患者収容能力をもつ施設へと成長していた。同様に、以前40名の看護婦だったところが今や100名になっていた。聖路加病院の建物は、1階から4階の高さまで、まちまちの、密集した建物群になっていて、ほとんどの部分が木造であったが、仕事の便宜性、サービスの仕組み、清潔さ、整頓などの観点からは非常にうまく工夫されていた。ピアス博士の印象では、聖路加病院は外見上、自分がかつて訪問した如何なる東洋の病院よりもアメリカの病院に似ていた。彼は、この病院の仕事の質の高いことを印象づけられ、また、外国人の医師よりもむしろ日本人の医師を採用するという、トイスラー博士の計画の賢明さにとりわけ言及して、こう書いている：「この病院は、西洋医学を学ぶ日本人医師の卒後研修の場として非常にすばらしいところである。」計画というのは、もっと大きい聖路加を建設する計画のことで、それはすでに進行中であった。現在の病院の建物と川との間で道路の向う側で、しかも今も看護婦寮として利用されている建物に隣接する土地が購入されていた。青写真はすでにひかれ、来る秋には建設工事が開始されるものと考えられていた (1921年ピアス博士の、日本の医学教育報告書06.7-609-p31, p107~108, 1914年12月15日付聖路加に関する対中国医療委員会の報告)。

エンブリー氏 (Mr. Embree) 東京に来る, 1922年

しかしながら、エンブリー氏が翌年日本を訪問した時にも、工事はまだ開始されていなかった。そのため、彼は、トイスラー博士と共に、その計画を詳細に検討することができた。後に彼が書き示したように、彼は、トイスラー博士の東京における個人的影響力の大きさと、計画中の新しい病院での病院サービスと看護婦訓練の高水準のかくれた有用性を見て深く感銘した (プロジェクト報告書, 100C, Vol. II, #19, p 2, 1922年11月27日, エンブリー氏とウッド氏の対談)。当時、北京ユニオン医科大学の学長であるハフトン博士 (Dr. Houghton) も在京中で、トイスラー博士とエンブリー氏との間の会議に出席した。その結果、即座に、トイスラー博士に彼の同僚の一人をつれて、北京ユニオン

医科大学を財団のゲストとして訪問を歓迎するとの招待が差しのべられた (ロックフェラー財団議事録, 1922年7月31日。p22123)。

トイスラー博士の北京訪問, 1922年

ロックフェラー財団は、日本の事柄に関しては、トイスラー博士の協力を頼りとしていたようであり、彼の北京旅行の表向きの目的は、彼に、中国における財団の方針や諸計画、及び、約束事項、友好、その他の行動方法に関する一般的な取り決めに一層精通させる機会を与えることにあった (R. M. ピアス博士よりトイスラー博士への手紙, 1922年8月2日付)。そのほかに本当のところは北京ユニオン医科大学ならば、東京の仕事に確実に貢献できよう、との期待もあったようであるエンブリー氏はトイスラー博士に、「望むらくは、北京の、新しい大学が医学生のための医学教育や一般的、ならびに、特別な研究や経験の機会を与えるだけでなく、極東全体の医療従事者間の会議や意見交換の中心場所として働くことによっても貢献できるであろう。」との手紙を書き送っている。とりわけ、エンブリー氏がトイスラー博士に提言したことは、「貴下が東京で計画されている大変重要な病院企画」のために、彼 (トイスラー博士) 自身の計画や契約を決める前に、まず、北京の病院建設や運営に関するロックフェラー財団の経験をじかに調査・利用することを忘れないように、ということであった (トイスラー博士の秘書談, 1922年8月12日, 609c)。トイスラー博士はこのアドバイスをすぐに快く受け入れ、新病院の計画を北京に持っていくよう、すでに手配済みであること、及び、「この旅行体験の成果がわかるまで」最終図面作成を延期することにした旨を伝えて、エンブリー氏を安心させた (トイスラー博士からエンブリー氏あての手紙, 1922年9月18日付, 609c)。

トイスラー博士は北京に日本人の助手の久保博士を同伴した。後に彼はエンブリー氏に、旅行は楽しかったし、「聖路加を助ける立場からと、真の成功だった。」と書いている。彼は、「機能している組織を実際に見ることが、自分にとって、こうも現実的に役立つとは考えてもいなかったし、まして、ハフトン博士の親切のおかげで、私は新しい聖路加病院の計画に関して、数えきれぬほどのアドバイスを得て、ためになった。」と書いている。数個の実際的なことがらを見た結果はすぐに効を奏した。トイスラー博士は特に久保博士が同伴したことに対して感謝していた。彼はエンブリー氏に、「久保博士が実際に北京の病院組織を見学した今となっては、ここ聖路加で必要とされている改革を導入することがひどくやりやすくなるだろう」と述べてい

る（トイスラー博士からエンブリー氏への手紙、1922年11月3日付）。

日本の病院における看護状況

もちろん、エンブリー氏の聖路加への関心のゆくえは看護の立場からであった。当時の日本では、聖路加は、高度な看護教育に徹底的な関心を示していた唯一の病院であり（1926年4月19日付、エンブリー氏からヴィンセント氏への手紙）、新しい聖路加は看護婦養成と一般的病院サービスの指導を今まで以上に専門化する所と期待されていた（1922年8月10日付、エンブリー氏の覚え書き、ハフトン氏とエンブリー氏による同意点24条、1922年エンブリー氏日記）。当時、日本の病院状況は全体としてなげかわしいものであった。最高の大学が医学を教えるその大学病院でさえ、それはまるで、経営のまずい寄宿舎以上の何ものでもなく、患者のケアや福祉をうけもつという点では、とても病院組織とはいえないひどいものであった。その大部分のところは、ベッドを備えつけていたところすら、ふとんは一切支給していなかったもので、入院患者は、自分でふとん包みを持ち込んでいた。低い等級の病棟ではシーツすら与えられなかった。火鉢も料理用、冬の暖房用に持ち込まれていた。患者は自分の家から食器類、タオル、洗面具、燃料、そして食料も持ってきた。病院が提供したものといえば、医学的処置ぐらいであった。スタッフは、これらすべての家事的身の廻りの事をとりしきるには数が不足していたので、患者は自分の世話をしてもらおうお手伝いを連れて入院するか、さもなくば入院してから雇うかした。このようなシステム、否、システムなどのない結果、病院規律を守ることは事実上不可能であった。そして、そもそも、ふつうのお手伝いと病院看護婦との間に区別が存在するか否かといったあいまいな考え方が広がるのも無理からぬことであった。

聖路加看護学校の初期の歴史

トイスラー博士が日本に到着するや否や驚いたことがある。それは20年ばかり昔の話であるが、日本は、医学の科学や理論に関しては世界に遅れをとっていなかったのに、その知識を病人のケアに適用する点でははるかに遅れているという事実であった。さらに、医学的立場からいって今の日本に最も重要なニーズの一つが看護婦の訓練にあるという事であった。それ以来、彼は次のように言っている：「応用医学の真髄は訓練された看護婦のサービスであり、近代的病院、あるいは、クリニックの成功は正に看護婦スタッフの技術

(skill)にかかっている。」そして、聖路加は、この考えを理想にかかげて、日本では無比の教育水準をかかげた看護学校をやっていかうと努力した。トイスラー博士のはからいで、ヴァージニア市リッチモンド州のメモリアル病院で訓練を受けた若い日本女性、荒木イヨさんの指揮のもとで看護学校が開かれた。彼女の指導のもとで、課程は三年間にわたり、そして、カリキュラムはアメリカの水準にのっとって組まれた。できる限り高校卒業者志願者の間から入学者を選抜し、そして、1917年までには、当病院は入学時の最低資格としては女学校（旧制）卒業の資格をもつものでなければならない、ということを経験が強く打ち出すようになった。1918年は1人の熟練したアメリカ人の看護婦を学校の校長役として確保したが、院内の日本人看護婦の実際の管理は相変わらず荒木女史の手にゆだねられていた。その後の数年間に、病院職員として、さらに4人のアメリカ人看護婦が加えられ、1922年までには、すでに、アメリカ看護婦協会（ANA）認定の必須課程と非常に類似したカリキュラムが導入されていたのである（1927年8月7日付ジャパン・タイムズの抜粋、1927年8月11日付けのトイスラー博士からハフトン氏あての手紙に添付されていたもの）。

北京留学のための財団からのフェローシップ助成、1923年

このような諸々の発展に貢献したいと思っていたエンブリー氏がまず考えたことの1つはフェローシップ助成をすることができるようにとの案であった。病院で最も優秀な看護婦2人を特別な勉強のためにアメリカへ送るか、さもなければ、1人ないし2人以上の看護婦を北京ユニオン医科大学の正式スタッフに採用し、そこで、しっかりした条件下で、かつ、十分な指導の下で経験を積ませるか、その何れかをとる、という案であった（プロジェクト報告書、100c, Vol. II, #19, p 1, 極東に関する会議、ヴィンセント、ピアス、R. S. グリーン、エンブリー、グレッグ諸氏、1922年9月1日付、及び、1922年エンブリー氏日記、ハフトン氏とエンブリー氏による同意点24条、1922年6月1日付エンブリー氏からの手紙の抜粋）。結局、後者の案が、ロックフェラー財団のフェローシップをうけて北京で勉強するという具体案へと展開し、ロックフェラー財団は、ハフトン博士（北京ユニオン大学校長）と北京ユニオン看護学校の校長の双方にその実現を勧めたようである（1923年1月17日付、ウォルフ氏からトイスラー博士への手紙、及び、1923年1月19日付けのハフトン博士からエンブリー氏への手紙）。トイスラー博士は、たとえ、2～3人であっても、そのような訓練の結果、「新しい看護婦のリーダーが養成されて、一群の

若い有能な女性たちの間から看護婦を志願しようとするものがふえる」ことになればよい、と考えていた。彼の勧めにより、1923年3月、そのようにフェローシップの認可が原則的には承認された。そして、ハフトン博士の要請で、実行委員会が個々の申請の審査をした（ロックフェラー財団議事録、1923年3月5日付、p. 23057）。このプログラムの審査にパスした2人の看護婦、カウムラ イクド嬢とキタデ ヨン嬢はその8月に北京での仕事につき始めた。

アメリカ留学へのフェローシップ要請は断られる、1924年

日本人看護婦を、訓練のためにアメリカへ送るという案の方は、その後数年までは実施されなかった。この目的のために特別な要請がトイスラー博士によって、早くも1924年6月に出されたが、これは、おそらく、北京のフェローシップ企画の成功に乗じてなされたものと思われる（1924年6月23日付、トイスラー博士からソンプソン氏への手紙）。しかし、ニューヨーク側は、病院の看護婦を米国に連れてくるということは「全く別の方針であり、慎重な考慮を要するもの」であると感じていた（1924年6月30日付、ヴィンセント氏からトイスラー博士への手紙）。エンブリー氏のトイスラー博士への説明によると、ロックフェラー財団が協力するのは原則として公的機関に限られていること、また、もしフェローシップを与えるとすると、その女性たちが聖路加自身に期待される貢献よりも、日本の公立学校において将来リーダーシップを発揮できるかどうかという観点から選ぶべきだということであった。以上のことについては、トイスラー博士は、財団の姿勢をよく理解された。彼は日本の病院の発展にも関心を示していたので、エンブリー氏には、聖路加学校の卒業生のほとんどは純粋な日本の病院に就職していること、フェローシップを受けた女性たちには帰国後、聖路加での地位が確保されているものの、公立学校につながる、更に重要な地位につきたいのなら、それにはいかなる妨害もないということを指適したのである（1924年9月18日付、エンブリー氏日記 p. 87）。

しかしながら、その後のヴィンセント氏（Mr. Vincent）とラッセル博士（Dr. Russel）との話し合いで、そのような申請は断わるべきだということが決定された。特にラッセル博士は、聖路加が日本政府の発展に多少でも影響力を及ぼすことができるなどとは信じていなかった（プロジェクト報告書、100c, Vol. II, #19, p. 6, 1924年9月23日）。エンブリー氏はトイスラー博士にロックフェラー財団の決定を説明したことではあるが、ロックフェラー財団は聖路加病院への関

心を欠いていたというわけではなかった。ただ、財団は、どの国の場合でも、国立の病院や機関と共に、かつ、それを通して、仕事をしたいこうとする一般的な基本方針を固持せざるをえなかったからである（プロジェクト報告書、100c, Vol. II, #19, p. 7, 1924年9月25日）。

聖路加のためのビード教授（Dr. Beard）の訴えも却下される。1923年

聖路加のためてにロックフェラー財団がもっと直接的に貢献してほしいという訴えはすでに1923年初めにニューヨークのチャールズ・A・ビード博士を通して伝えられていた。実は、1922年秋、東京市知事の後藤子爵が、市の改善計画を設計する上での顧問として、ビード教授を東京に招待した。彼の到着後まもなく、ビード教授は軽い病気のために聖路加病院で治療を受けた。その際、トイスラー博士と、東京の保健衛生状態に関して話し合う機会を得た。彼は新しい病院の建設用地や計画を見た後、その拡張計画の全体を入念に検討した。それから彼は彼自身の意図で後藤子爵の元について、共にこの問題を取りあげ、市全体の近代的保健衛生プログラムを開発させるために、聖路加を中心施設の1つとして利用することを強く勧めた。後藤子爵は、新しい聖路加の完成、ならびに、看護学校と職員寮の建設に必要な金額のうち、50%は病院側で募金するが、残りの50%はアメリカ側から得たいという案に全面的な興味を示した。そこで、ビード教授は、これまた彼の意図で、その申請案を書き記した手紙をヴィンセント氏に送った。トイスラー博士自身は、今、ロックフェラー財団に訴えるのはよくないと考えていたようであるが、結局、ビード教授がその手紙を書くことに同意を示した。トイスラー博士としても、なるべくなら早いうちに計画を押し進めたい気持ち一杯であったからである（1923年1月19日付、トイスラー博士からピアス氏への手紙の抜粋）。

ロックフェラー財団はこの申請を却下した。理由は米国内での看護婦のフェローシップ プログラムをもちたいという案が却下されたのと同じ理由、すなわち、ロックフェラー財団の方式は、私立の病院より公的機関に直接協力する線を示したものであるという理由であった。ヴィンセント氏はビード教授に次のような手紙を送った。：「中国におけるむしろ特別な活動は別として、我々は、病院の一般的プログラムに援助の手を拡げたことはなく、たとえ聖路加のいうような非常に広い視野に立ったプログラムでも、この一般方針に例外を作るべきではない。」中国の場合、ロックフェラー財団のプログラムの強調点は、病院への援助はだんだんと少くなる方向にむけられているが、反対に、

医学教育と、医療や公衆衛生領域に示される公共サービスの方にはもっと重点を置いていたのである。さらにヴィンセント氏は、注意深く次のことも指適している：ロックフェラー財団側は、長年にわたるトイスラー博士のすぐれた業績のことはよく知っているし、その内いつか提出されてくるかもしれない「日本政府の公衆衛生活動に関する協力要請に応じられる機会が来ることを心に留めない」わけではないと。事実、財団が両国の共通利益を認識している証拠に、すでに財団の役員たちを日本に訪問させたり、資金援助をしている日本医学者の委員会のメンバーたちをまもなく訪米させることにもなっている。(1923年2月6日付、ヴィンセント氏かざビアード教授への手紙)。

日本の看護に寄せるロックフェラー財団の関心度

日本への関心を語るこのような言明の裏には、財団は、ただ要請が見目で受けつけられないといいきってしまっただけで見向きをしないという心算ではないことが意味されていたのである。特に、エンブリー氏は、1921年の最初の訪日以来、看護婦養成についての、何らかの前向きな努力がかなえられる可能性を心に抱きつけてきたのである。彼のこうした関心をさらに強めたのは、国際衛生局(International Health Board : N. H. B.) の極東プログラムから生まれようとしているニーズのせいである。1924年1月、彼は、ハイザー博士(Dr. Heiser)との協議のあと、ヴィンセント氏に看護教育の重要性を示唆した。すなわち、「看護教育が軽視されているとか、遅れているとかなどとIHB側に思われることが一切ないようにするために」早急に日本とフィリピンの看護教育を発展させることがいかに大切か、ということである(プロジェクト報告書, 100c, Vol. II, #9, p. 4~5, 1924年1月31日付)。エンブリー氏は当時、聖路加よりも東京の帝国大学病院の方に深い関心を寄せていた。そこで彼はラッセル博士(Dr. Russel)との協議の後、その旨の一通の覚え書きを最後に書いた。この覚え書きは、もしかしたら、ラッセル博士が「ハイザー博士に手渡ししてくれるかもしれないし、しかも、ラッセル博士自身、日本の衛生と医療に関する調査を考えてもよいと留意してくれるかもしれない」と推測したエンブリー氏のメモであった。(プロジェクト報告書, 100c, Vol. II, #9, p. 5, 1924年2月4日付、及び1924年2月4日付、エンブリー氏からラッセル博士への手紙)。

新聖路加の建設工事始まる、1923年4月

そうした経過とは別に、新聖路加の計画は東京にお

いて徐々に実行の歩みを示したが、その進展ぶりは予想以上に遅々とした。それは具体的に進める上での困難や、適正な建築上の、また工学上のアドバイスが土地柄上得にくいためであった(1923年1月19日付、トイスラー博士からピアス氏への手紙の抜粋)。しかし、1923年4月になるまでに、トイスラー博士はエンブリー氏に、病院は実際に工事を始めており、「きょう初めて、コンクリートが打ち込まれた」と報告することができたのである。

「私はコンクリートミキサーがこんなに楽しい音楽を創り出そうとは思ってもいなかった。だが、10年間もの間、この音を聞くのを待ちわびていたのに、私にできることといえば、砂利とアサノセメントが、電流不足のせいででたらめに混合されているのをはらはらしながら、その現場から我が身を引き離すことしかなかった。しかしながら、技術担当者のアルフォード氏(Mr. Alford)は、明日までに必ずこの機械がちゃんと動くようにすること、そして、5月20日までに基礎工事終了という契約を推すために、2台のミキサー車を作動させる旨を約束してくれた。……(1923年4月14日付、トイスラー博士からエンブリー氏への手紙)」。

9月1日の地震と津波、1923年

次の9月1日には、悲惨な地震、火事、津波が起こり、東京の3分の1と横浜全土がぬぐい去られた。東京だけでも、280,000人の死傷者が出、その大半は火事によるものであった。聖路加では、病院、看護学校、そして、他のすべての建物が全壊した。病院にいた患者は、道路までもなめつくした火から救出されて、新しい建物の、最近完成した最下部に移され、そこにたまった雨水で濡れたままのゴザで包まれていた。パーシング元師(General Pershing)の個人的なはからいで、軍隊用テント式病院一式がマニラから急送され、全壊した病院の場所に隣接している区域に組み立てられた。これは、1923年の冬から1924年にかけて役に立ち、1924年の後半には、東京市より支給された木材を使ってバラックの建物が完成した((聖ルカ病院と看護大学(College of Nursing), p. 7, 609c, 一聖ルカ国際病院, 報告: 日本のためのアメリカ医療センター(American Medical Center for Japan) 609c-聖ルカ国際病院, 報告)。

財団からの緊急援助

ここで触れておいた方がよいことがある：財団は、この災害の間、北京のハフトン博士に委任して、北京

ユニオン医科大学からの寄贈品としての必要物資と一緒に、外科系と看護用の材料を東京へ送る計画をすすめるように援助した。さらに、実行委員会から、30,000ドルが、必要備品費として支給された。しかしながら、前者の計画は、後に、実行不可能であることがわかった。一方、30,000ドルの資金の方は、ハフトン博士の勧めにより、その裁量は北京医科大学の実行委員会にゆだねられ、結局、ハフトン博士の希望通り、東京大学医学部の医療費、ならびに、他の必要物資のための直接費用として、かつ、北京に3～4人の日本人教授を家族同伴で招いて、大学研究所で研究してもらうための費用にあてられることになった（ロックフェラー財団議事録、1923年10月2日、p.23156）。この同じ緊急事態のために、さらに700ドルが財団から支給され、国際衛生局、ならびに、財団医学教育部の3名の東京滞在中の公費と宿代にあてられた。このリーチ博士ら3名（Dr. Leach, Miss Fitzgerald, Dr. Carter）はそれまでマニラで働いていたが、一般救助活動を支援するため、ウッド元師（General Wood）の命で日本に派遣されてきたのである（ロックフェラー財団議事録、1923年12月28日、p.23245）。

ピアス博士（Dr Pearce）による聖路加の推薦、1924年

1924年、トイスラー博士は再度、当病院再建資金を集めるため訪米中であつたが、この時には、彼は財団とは接触しなかったようである。我々がよく知っていることは、彼は、スタンダード石油会社取締役のチャールズ M プラット氏（Mr. Charles M. Pratt）と、コモンウェルス・ファンドのバーバラ クイン女史（Miss Barbara Kuin）に援助の申請をしたということ、及び、その両者がロックフェラー財団にどう善処すべきかの忠告を求めてきたということである（エンブリー氏の1924年5月6日付の日記、p.75、及び、1924年7月3日付のクイン女史からエンブリー氏あての手紙）。ピアス博士は、この支援活動を心からバックアップする用意があつたようである：

彼はクイン女史に書いている：「この病院は聖公会のミッション病院としてスタートし、日本人と外国人の両社会に奉仕し、その名前が示す通り、かなりはっきりした国際的局面を呈している点で東京ではユニークな地位を占めている。当病院は、今まで、多くの帝国医科大学から教育病院として注目されてきたけれども、常に、一般大衆の福祉事業に密接なる協力をしてきた。とりわけ、最近の地震や火事の際には、緊急救済活動のために、日本政府から相当な援助を受けた。東京の重要医人の幾人かは、この病院の支持者であり、この病院には多大な関心を示している。在日外国人た

ちにとっても、この病院が、外人らの慣れているサービスを提供する唯一の病院であることはもちろんである。」

「私が理解するところでは、トイスラー博士は、東京帝国大学医学部のスタッフとの協力のもとに、この病院に、かなりはっきりした卒業研修システムを計画しておられる。以前の病院は、そのサービス面、設備面の範囲では近代的水準に達していたし、また、優秀な看護学校も持っていた。けれども、新しい建物ができれば、こういうものは一層進歩することは確かである。」

「アメリカの努力の賜物なり、国際的善意を育てる施設なり、日本の医療の発展のための手助けになることなどすべてを考えると、この病院に与えられる如何なる援助も全く正しい行為と受けとられるはずである」

（1924年7月9日付、ピアス博士よりクイン女史への手紙）。

日本政府との協力計画案、1925～1926年

1926年、オイスラー博士がついに財団と渡りをつけたのは、1つのはっきりした政府企画に関してであつた。実は、例の地震のあとの1924年春、文部省は聖路加に、日本中の中学校における、医療・看護指導を再編成するため、米国から人材を確保するよう、正式に要請してきた。再編成の仕事は文部省の総監督の元で、学校保健委員会を通じで行なわれていた。北博士はその委員長である。聖路加の訴えに応じて、アメリカ人医師1名と看護婦1名が当病院のスタッフに任命され、1925年9月、アメリカで卒業訓練を受けたことのある、日本人医師2名、及び、北博士の要請で、1925年の夏と秋に、或る調査が行なわれた。この調査をみて、後日、トイスラー博士は「びっくり仰天した」と評した。悪習と、病氣予防上最も初歩的な衛生習慣の欠如が明るみに出された。その結果、学校児童用クリニック（a clinic for school children）が聖路加に開設され、日本中の学校保健に関する問題を解決するための実証センターとなった。さらに、北博士は、聖路加に、その看護婦養成学校の中に公衆衛生看護婦養成講座を正式に組み入れるよう手配してほしいと要請した。児童の実際上のケアや衛生監督にとって最もひどい障害の1つは、学校看護婦の不十分な訓練と精神的能力にあつたので、北博士は近代アメリカ式水準にかなう看護婦訓練を行なうことを切望していたからである。彼は、その要求の際、聖路加でそうした特別訓練を受けた看護婦には、文部省の指揮の下に、公立学校で正式に任命される旨を確約した。そして、ことを早めるため、鹿島女史（Miss Kajima）という人が、日

本における公衆衛生看護のための学校保健課のアドバイザーに任命された。彼女は、同時に、聖路加の正式職員としても任命され、院内の社会奉仕事業の主任、ヌノ女史 (Miss Nuno) の直接配下におかれることになった。

トイスラー博士はその要請を「公衆衛生看護における、現在の不十分な方法に一大改革を起こさせる」機会と考えた。さらに、そのことで日本政府と公式に接触することになれば、公衆衛生における、ほかの問題も解決されることになって、日本全体のための基準が新たに設定されることになろう、と予測した。しかしながら、聖路加の財政事情はこの申し出を受け入れる状態ではなかった。そこで、トイスラー博士は北博士に、アメリカから必要な援助を得るよう自分が最善をつくすつもりだと告げた(1926年1月25日付, R. B. トイスラー博士から G. E. ヴィンセント氏 (G. E. Vincent) への手紙, 及び、添付メモ, 609c)。

財団の態度

1926年1月、トイスラー博士はニューヨークのヴィンセント氏 (Mr. Vincent) に提案書を出した。ヴィンセント氏がただちにとった反応は、「我々の方針では、この種の計画への参加は不可能である。」ということであった。ヴィンセント氏は、慰めの言葉をかけることなくただトイスラー博士に、本件はエンブリー氏の帰国まで据え置かれる旨を記した覚え書きを作成するようトイスラー博士に述べた (1926年1月22日付, ヴィンセント氏会見記録 p22~23)。

そのエンブリー氏は1925年9月に極東太平洋に向けて出発していて、トイスラー博士がニューヨークでヴィンセント氏にその要求を提出していた時は丁度日本にいた (1925年、及び1926年のエンブリー氏会見記録参照)。1926年4月に帰国した彼は、聖路加は、当時の日本における看護教育をアメリカが支援する唯一のチャンスを与えてくれたことになる、と確信していた。そこで、その提案について、ヴィンセント氏と話し合い、さらにピアス博士とも話し合った(1926年4月26日付, エンブリー氏会見記録 p29、及び1926年4月15日付, プロジェクト報告書, 100c, Vol. 11, #19, p13)。そして、4月21日、役員会議に取りあげた。出席者は、エンブリー氏とヴィンセント氏ほかに、ピアス博士、ラッセル博士、レイド女史 (Miss Reid)、ビード女史 (Miss Beard) であった。エンブリー氏は、すでに、極東にいるハイザー、カーター両博士と一緒に日本の状況を綿密に調べていたので、そこでわかった事実、すなわち、日本では、この仕事を請け負うのに十分な関心を持っている病院は聖路加病院だけである、という事実を席

上で告げた(1926年4月21日付, 部内会議)。エンブリー氏はそこで具体的に提案した: 財団が聖路加病院の看護学校に、年間総額8,000ドルを5年間支給すること、しかも、「同学校の卒業後さらに上級の学問をしたい人には、帰国後、必ず学内の地位へつくという条件付きで、フェローシップを提供する用意があること、日本の政府あるいは大学が賛助する看護教育の発展に関して常に報告を受けるような手配すること。」以上の契約をするということであった (1926年4月19日付, エンブリー氏からヴィンセント氏への手紙)。

一見、この席上では、決定的な提案は何一つ承認されなかったのであるが、実は次のことが了承されたのである: 「日本の文部大臣から、これが文部省と聖路加の共同企画である旨が明確にされている正式な懇請状がくれば、役員一同、政府との協力という財団方針の定義に一致するものとして、申し出を認めても正当化されるであろう。」そこで出た質問は、果して、聖路加病院が日本国内で日本の病院 (as a Japanese institution) としてみなされているのかどうか、また、一般日本人の看護への関心と支持を増大させるためには、プログラムをすぐ聖路加で始める方がよいのか、それとも、もっと決定的に日本的な主催者が現われるまで待った方がよいのかという問いであった。ピアス博士は、最終的には慶応義塾大学で行なう可能性に関心を示していたようである。というのは、彼は、5年間という制限期間をつけた、聖路加への協力には賛成するものの、内心、期限終了時には、慶応義塾大学へ協力を強行したいと思っていたからである (1926年4月21日付, 部内会議)。役員たちがもう1つ興味を持っていたのは、アメリカ赤十字社 (American Red Cross) の資金で建設されることになっている新しい病院である。これは、ロックフェラー財団の招待で、日本医学委員会の一員として訪米したことのある日本人医師、三浦謹之助博士の指揮で建てられることになっていた (ロックフェラー議事録, 1926年5月26日, p. 26101、及び、エンブリー氏の1923年の日記の中の、1923年10月、ワルドーフ アストリアにおける、日本医学会招待晩餐会に関するメモ)。その他、衛生院 (Institute of Health : I. H.) の設立案に関連して、(日本の) 公衆衛生看護の発展の可能性についても議論されたようである (1926年4月21日付, 部内会議)。

会議は確定的な忠告をみずに休会したが、出席者の全体的な姿勢は賛成のようだった。その根拠として次のことが挙げられた: 「当企画が主にベッドサイドの看護婦の養成であること、ロックフェラー財団の医学教育部の賛成を得ていること、将来、政府とのはっきりしたつながりができそうなこと、衛生院案が望ましいものとして実際に設立した時、その公衆衛生看護講

座の発展を邪魔することにはならないであろうということ」(1926年4月21日付、社内会議)。しかし同時に、エンブリー氏は余り樂觀視はしていなかったようである。というのは、彼は、会議の一週間後に、トスラー博士に次のように書き送っているからである：「理事会の好意的な反応を余り期待しない方がよいかと思う。たしかに、仲間の1人や2人は、個人的には大変な関心を寄せてはいるが、現在の財団のやり方としては、こんなに革命的な提案が理事会で承認されるかどうか、私には全く確信がないからである。」(1926年4月27日付、エンブリー氏からトスラー博士への手紙)

申請は条件付きで承認される、1926年5月

本件は、日本の看護水準を高めるための一般プログラムの一部として、まず理事たちに提出された。理事会では次のことがらがざっくばらんに述べられた：「事態は、何を支援するか、というような簡単なことではない。というのは、片や、高い水準の看護婦養成、あるいは看護婦サービスをとりしきる準備が、一流大学病院ではまだできていないという事実があるかと思うと、片や、その必要性を認識している医師や保健従事者が沢山いるからである。5～10年もすれば、大学医学教授陣や大学病院全体に、看護に関する姿勢が変わる見込みがありそうである。もし、ほんとうに、そのような変化が起こった時には、重要な発展への協力を求める訴えが提示されるであろう。しかしそれまでの間チャンスがある毎に援助に当る、特に、将来、リーダーや教師として働ける優秀な女性集団の養成という点において援助の手を差しのべることが非常に望ましい。従って、理事の方々に勧めたいことは、まずチャンスが与えられた病院から、そういった仕事を喜んで始めてほしいこと、その際、理解しておいてほしいことは、いかなる病院であろうと、協力するのは、政府当局からの特別な要請があった場合に限る」ということである。果して、1920年5月、そのような形の協力が正式に認められ、実行委員会は「フェローシップのためにふつう支給される額に加算した額、すなわち、年間10,000ドルを越えない額を5年間に亘って支給する」ということを承認した(1926年5月26日付、ロックフェラー議事録, p. 26101～26102)

役員たちが聖路加に望んでいたことは、政府当局からの直接要請状を入手することであった(1926年5月27日付、エンブリーからトスラーあての手紙, 609c)。当病院と帝国政府との関係に関して、トスラー博士は、すでにニューヨークでエンブリー氏に次のように述べていた：「もし我々が文部省と接触すれば、看護学校は事実上、国立施設になるだろう。」さらに、彼は書いて

ている：「文部次官と話し合っただけでなく、北博士や大西博士と話し合った時でも、このことを再確認した。……彼(北博士)が言うには、そうなれば、我々の学校の卒業生は文部省の公式認定証をもらうことになって、しかも、政府のハイスクールの保健学の教師として使われるであろう。彼は斉藤博士にあてた手紙で、文部省ではすでに我々の学校を国家公務員用の看護婦を養成する政府のカレッジとしてのランクづける用意がある、と述べているが、これは、彼がその前に私に約束した通りである。この計画はすばらしいもので、当学校の地位を強化するばかりでなく、日本の熟練看護婦の地位も強化するのに大いに役立つであろう。」

「長年の経験から、私が自信を持って言えることは、我々が実際に国家から給料をもらう身分になるよりも、むしろ、政府とこのような形で直接に接触している方が仕事がしやすいということである。国家に雇われていれば、日本のどこのお役所仕事にも共通の障害や干渉にもがまんしなければならないからである。それに、今の我々にはアメリカ人教師を雇って、スタッフの一員として使うこともできる。このようなことは、もし政府の下で指図されるままの学校では無理なことである。政府が我々を信任してくれているおかげで、当学校は日本の看護課程全体にかなりの影響と方向を与えるユニークな立場にある。だから、我々さえこのチャンスをうまく利用できれば、多方面に亘る貢献ができるすばらしいチャンスを持ち合わせていることになり、それを喜んでいる。」(1926年4月20日付、トスラーからエンブリーあての手紙, 609c)。

エンブリー氏は、理事会の承認を受けるとすぐにトスラー博士に次のように書いている：理事会は当校と政府当局間に存する密接なつながりぶりに卒直に感銘しており、政府の要請に対する即答として、喜んで融通するつもりである(1926年5月27日、エンブリーからトスラーあての手紙, 609c)。彼はその後の会議で、もっと直接的に言った：「但し、援助は、帝国政府の要員(an official)の正式申請書簡があれば、という条件つきである。」——帝国政府の要員といっているが、おそらくは、文部大臣官房(the secretary of Education)と言いたいところであろう(1926年6月7日付、エンブリーの会見記録, p. 68～69)。来る8月には、北博士から手紙が寄せられ、そこには次のように述べられていた：「ロックフェラー財団が聖路加病院の看護婦養成学校に喜んで提供するいかなる援助も、私にとっては大変ありがたいことである。というのは、正にこの種の学校こそ今日日本で大いに必要視されているものであって、そのような学校の発展に、我々はお手伝いをしたいと計画しているからである。さらにそ

れは、この国における看護職の発展を導く直接的な貢献となるであろうし、大いに歓迎すべきである（1926年7月18日付、北よりエンブリー氏あての手紙コピー参照）。

1926年9月～11月、50,000ドルの支出承認

9月1日、実行委員の大多数から、申請案の非公式承認が得られた。その1週間位后、年間10,000ドルが5年間、看護学校の教育費として聖路加に与えられることになったという通告がトスラー博士と北博士のもとに届いた。エンブリー氏がトスラー博士に通知したように、その充当金は教師や監督者の給料、及び、教育施設としての学校の付随的経費のための金であって、寄宿舍建設や病院の維持費、つまり、通常運営費のためのものではなかった（1926年9月8日付、エンブリー氏からトスラー博士あての手紙、609c）。9月26日の実行委員会々議の議事録に、最初の充当金は2,500ドル、残金47,500ドルは11月に充てられる、という正式な誓約が記録されている（1926年10月26日付、ロックフェラー財団議事録 p. 26257）。

ヴィンセント氏が後に述べるように、北博士からの手紙は理事会の出した各件の意は汲んでいるものの、

「日本政府からの申請そのもの」ではなかった（1926年9月24日付、ヴィンセント氏からエンブリー氏あての手紙、609c）。しかしながら、エンブリー氏は北博士に充当金の通知をする際に、ロックフェラー財団の援助を受けるためには、文部大臣の手紙をもらってくるように、そして、少なくともそれさえあれば、ヴィンセント氏の言うように、援助はたちまち承認されるから、と忠告をしていた（1926年9月8日付、エンブリー氏から北への手紙）。ヴィンセント氏はつけ加えて言った、「もし彼（文部大臣）がそれを拒否しなければ、私が思うに、申請記録事項は申し分なしである。」（1926年9月24日付、ヴィンセント氏よりエンブリー氏あての手紙）。

トスラー博士は後に、財団に対してこの援助なくしては看護学校計画の展開は不可能であったろう、と書き送った。彼は、又、エンブリー氏にも、「あなたのご尽力のおかげで、年間10,000ドルを財団が約束してくれた。そのことを、我々が約束通りに計画を遂行していくことができるということを政府役人に納得させる上で最大の決め手になった。」（1927年11月30日付、トスラー氏からエンブリー氏あての手紙）。

（本文翻訳には半田香代さんの援助を受けた。）

